

創造の源泉としての光と影—CONNECTEDkind が影を必要とする理由

横田和子

CONNECTEDkind（以下、CKと略記）のドロップレットには、必ず影が含まれています。そのまま十分美しい落ち葉や花びらの傍らに、なぜ必ず、暗い影が宿らなければならないのでしょうか。

もし、世界から影が失われてしまったらどうなるのでしょうか。あるいは影が分離、独立してしまったら。シャミッソー、アンデルセン、藤子・F・不二雄らによって、世界中で同様の問いがモチーフとなり物語が紡がれてきました。いつしか主人公の影が主人公自身を逆転し、乗っ取られそうになる。世界が反転してしまいかねない窮地が訪れる。そのような物語には、古来影が恐れられるだけでなく、同時に人を魅了せずにはいられない力や変容の源泉を影が有していることを示しています。追い出したはずの影がいずれ戻ってきて必ずしっぺ返しを喰らう物語、光と影の相剋と言ったモチーフは、繰り返し物語に描かれ、語られ、今なお、『進撃の巨人』などにも脈々と息づいているように思います。

あらゆるものが等しく明るく照らされ、曖昧さも陰りもなくなった世界は一見、理想的に思えるかもしれませんが。しかし、同時にその世界からは深みも立体感も奥行きも失われてしまうでしょう。光だけの世界は、息苦しいほど平板で脆いものになるでしょう。影を失った光は、もはや光ではありえません。

日本で初めてユング派分析家となった心理学者の河合隼雄は、異文化との接触の中で「影の自覚」をもつことの重要性を説いています。影とのつきあいは危険を伴うが、そこにこそ人間存在の深さがあるのだといいます。CKという活動は、まさにこの「光と影との出会い」を、言葉ではなく、色と形を通して体感する場なのだと思います。ドロップレットの中に浮かぶ影は、見る人に無意識の揺らぎや、心の奥底に、見ないようにしていた自分、目を背けていた自分、ざらつきや苦いもの、醜いものすら浮かび上がらせるのです。それらも本来、私たちの大切な一部なのですが。

河合隼雄と懇意にしていた村上春樹は、アンデルセンの『影』を読んだうえで、影と向き合うのは個人だけでなく、社会や国家も同じであると述べています。

「すべての人に影があるのと同じように、どのような社会にも国家にも必ず影があるからです（中略）我々は時としてそのような影の部分、負の部分から目を背けがちです。あるいはそのような部分を力で排除してしまおうと試みます。人は自らの暗い部分を、負の資質を、できるだけ目にしたくないと望むものであるからです。しかし塑

像が立体として見えるためには、影がなくてはなりません。影なくしては、それはただ平板な幻影となってしまいます。」

影の世界にはしばしば動物が現れます。CKの作品群にしばしば、鳥や蛇、魔女、ピエロ、妖精——それらはトリックスターとして、光と闇のあいだを自由に行き来する存在——が登場します。人間の暗い側面には、本能的で動物的な衝動が潜んでいます。CKのモチーフがこうした存在を呼び寄せるのは、私たちの無意識の中に眠る「野性」と再び出会うためなのだと思います。そこには、秩序や理性では律しきれない真実が息づいているのです。トリックスターは自由な動き、変貌や非日常、流動性を象徴します。河合は、ある人が人生を創造的に生きようとするとき、自分の心の中のトリックスターとの接触を失わないようにすることが大切であり、道化性を失うと弾力性に欠け、危険性に満ちると述べています。もしかしたら、いつの間にかトリックスターを飼い慣らし、抑圧していくことが、学校生活や家庭での生活のなかで当たり前になってしまうこともあるかもしれません。自然から切り離された生活を送る現代人は多かれ少なかれ、この問題を抱えているでしょう。けれども、CKを通して、影のおかげで自分の中に棲まうトリックスターに再会することができた、ということもあるかもしれません。

ユング派分析家のジェイムズ・ホリスも、影について興味深いことを述べています。彼によれば、影自体は悪ではありません。影の中には創造性、癒し、意識の拡大、世界の修復など良い面もあるといいます。とはいえ、影は、私たちが内面で無視してきたものの集積です。そして、それを無視すればするほど、影は外側から現れてくるといいます。個人の影が集積的な影と結びついたとき、それは社会的暴力や差別、排除の形で表出することすらあります。だからこそ、影に向き合うことは、癒しと創造の始まりであり、世界の修復に向けた第一歩なのです。ホリスは、「愛せない場所を愛せるようになるまで、癒しは体験できない」こと、「影に取り組まない人生はもっと厄介」であると述べています。そう考えると、CKが影を通して、傷の修復や変容に関わる活動であること、そしてこの影との厄介な対峙を通して、人生や社会がもっと厄介になることを未然に防ぐ、ウェルビーイングの観点からも予防的な活動であるとも言えるかもしれません。

CKという場でなされる表現は、日常生活で忘れがちな「影」を扱う稀有な営みです。そこで私たちは、光に必ず付随する意にそぐわないもの、制御できないもの、意識では掴みきれないものと出会います。ときにそれは不快で、邪魔に思えるかもしれません。影が「邪魔だ」「厄介だ」と感じられるとき、私たちは自分の内にある痛みや傷に無意識の中で触れているのです。そしてその感覚が、「自分が自分であること」の始まりになるのです。

嫌っていた、見たくないと思っていた、効率的でも美しくもない、正解でもない、そんな影を、優しくケアすることができたなら。それは、見たくない自分をちょっとだけ赦し、受け入れ、違うところに連れて行ってくれるでしょう。影をケアすることで、ケアされるのは自分自身なのだと、気づく人もいるかも知れません。ここでは、言語化することは重要ではありませんが。

教育現場においても、「言語化」や努力の成果の「可視化」が求められる今日、「委ねる」「手放す」「諦める」といった行為は見えづらくなっています。また、言語化できる知識の量やレスポンスの速さ、正確などを求められがちなのは教育現場だけではなく、職場などでも同様です。たった一つの正解に収斂していく世界では、何かをなせばなすほど自己肯定感が下がり、一方で承認欲求が肥大化していくこともあります。しかしCKには正解も不正解もありません。その活動時間は、言語化しなくても良い時間、ためらったり迷ったりすることが許される、そこは「生きられた時間（カイロスの時間）」なのです。感覚に身をゆだね、無意識の流れに開かれていく——そのとき、心の奥深くでごく小さな死が起こり、そして再生が始まるのです。

CKの時間には、そうした“委ね”や“開かれ”が静かに息づいているのではないのでしょうか。影を抱えたまま生きること。影を抱えたままにしか生きられないこと。影がなければ辿り着けなかったクリエイションを味わうこと。それを感覚で楽しむこと。私たちが「傷の回復」に向かうプロセスが、CKには集約されているのかもしれない。

CKのドロップレットには影が含まれていなければならないのです。光と影の双方が等価であり、創造には不可欠なのです。そして影は欠陥ではありません。存在の深みを支える根であり、光の差し方によっては本体そのものよりずっと大きくなったり、小さくなったりします。捉えどころのない、邪魔にすら思える影を排除し、分離して、安心するのではなく、接続、受容、統合して、その捉えどころのなさに向き合うことで、世界は小さく全体性を回復させ、息づき始めるのです。

参考文献

河合隼雄（1985=1976）『影の現象学』講談社

ジェイムズ・ホリス(2009) 神谷正光・青木聡訳『「影」の心理学 なぜ善人が悪事を為すのか』コスモス・ライブラリー

ハンス・クリスチャン・アンデルセン（1847）楠山正雄訳『影』青空文庫

https://www.aozora.gr.jp/cards/000019/files/58861_72476.html

村上春樹(2017)「影の持つ意味」『Monkey』 vol.11、スイッチパブリッシング、
pp.138-147